

紀伊・房総

くろいお物語

◇12◇

紀州漁民の菩提寺で 勝浦市鵜原(ういはら)に立つと、有名な真光寺(まみくわう) 檀家で、息子(こ)の月命日

に必ず墓前に手を合わせ、和38)年に鵜原へ嫁いす漁師の母、野村たまできた。きさん(75)―仮名―に。そのころの漁期は大出会った。彼女は夫(お)はイシナギ、6月はイサギ(小さい魚)、キメ(養望的)となった。ヤリイカ、スルメイカ。主人は海士(あま)でサザエ、アワビを得意とし、生アワビを食べさせる民宿は大繁盛した。新婚早々で喜びもひとしおだったという。大分では味わえない生活

漁、10月から翌年6月まではキンメダイをメインに漁をした。特に息子(こ)はキンメダイが得意で、1日に100匹も獲るなど、他の漁師の羨望(うらやま)の的となった。彼は浄土真宗本願寺派の真光寺の檀家で、親の真光寺の命日に合わせ、キンメダイ3匹を大型船とやや小型の船が係留されていた。息子の船とよく似ていると、差し示す母親の指先がかすかに震えた。

鵜原港漁師の母

絵と文・熱田親恵

題字・熱田泰華



千葉県勝浦市鵜原の漁港のスケッチと写真

船に思う亡き息子

ができ、幸せな家庭を築いた。こんな中で育った長男が漁師を継ぐことを決意して、地元の高校の漁業科に入学。在学中に漁師に必要な資格を取り、卒業したら早速海に出て、父と祖父から漁の勘所を学び取った。息子にバトンを渡すため、360馬力の大型船「一丸」を新調し、3月から8月まではカツオ

らは「イジメ」を受け、波打ち際には、岩風呂のように四角に削った。息子の掘り下げた「いけす」がいくつもあった。これは紀州根といわれ、かつての紀州漁民の遺産だ。これに隣接する鵜原湾の砂浜には白い鳥居が立っており、海を神とする紀州・串本の漁民信仰が息を学ぶ一日となっ